SGH校での英語教育改革

―私立中高一貫校でのTOEFL Junior®活用

大阪府にある私立中高一貫校、清風南海学園中学校・高等学校は、仏教教育を柱とした教育を行い、２０１３年に創立50周年を迎えた。建学の精神は「徳・健・財、三拍子そろった姿でルールを守り、世の中のために尽くす人間となるために、勤勉努力する理想的な人物を育成する」である。１９８３年には中学校を開設し、中高一貫化を実現。現在では難関国立大学を目指す生徒も多数学んでいる。

今回、同校の国際次長・米田隆先生、英語科でSGHプロジェクトチームの田中晶子先生にお話をうかがった。

SGH指定で新たな一歩を

同校の一番の特色は、仏教教育を柱としている点である。「宗教」を必修科目とし、先祖や親を大切にしたり、年長者を敬い、礼節を重んじたりと、仏教の教えを大切にした教育が行われる。高校に入学してすぐ、1年生の4月には、早くも2泊3日の高野山修養行事が設定されている。

進学を目指す、特進コースが充実していることも特徴の一つだ。同校では、6年一貫教育のよさを生かしたスーパー特進・特進コースと、高校からスタートの3年間の特進コースがそれぞれ設けられている。いずれも、難関国公立大学へ現役合格を目指す生徒たちが、特別のカリキュラムで学ぶことができる。

そうした難関大学進学を実現するために、同校では「授業第一主義」の学習指導を行う。中学・高校ともに50分授業、7時限（土曜日も4時限）の週39時間授業を基本とし、日々の授業で力をつけることを目指す。さらに少人数制の個別指導、セミナー学習等が用意されている。

そして、最近の注目すべき動きが、２０１５年度からスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）校に指定された点だ。指定以前からも「生きた国際性の育成」を柱に掲げ、いち早く国際教育に取り組んできた。海外校との姉妹校提携や希望者への留学制度の設置、外国人教師による英会話指導の充実をはじめとしたコミュニケーション能力向上の取り組み、グローバルコースの設置など様々な取り組みが、ＳＧＨ指定によってさらに発展していくことが期待される。こうしてＳＧＨで学んだ生徒たちが、社会をよりよい方向へ導くグローバル・リーダーとして活躍していくことだろう。

世界レベルの英語教育を行いたい

そうしたＳＧＨ校としての教育、あるいは国際教育で特に核となってくるのが英語教育である。同校ではまずは「使える英語」を身につけることを第一に、英語教育に力を入れる。一方で大学進学にも対応できるよう、こ

の2つの方向性のバランスを取りながら指導を行っているという。特に最近では保護者、生徒とも単なる受験英語ではなく「グローバル時代に使える英語」「社会で使える英語」への関心が高まっているという。あるいは、国内だけでなく海外大学進学をはじめとして海外へ目を向ける生徒も以前より増えてきたという。こうしたニーズに応え、いち早く対応しているのが同校である。

一方、大学入試の英語も、周知の通り大きな転機を迎えている。特に英語の4技能向上が求められ、センター試験に替わる新テストの英語（外国語）でも4技能をしっかりと測定できる民間試験の導入が決まっている。

こうした動きにはどう対応しているのか。同校が特に力を入れるのがTOEFL Juniorだという。

TOEFL Juniorは世界最大の教育測定機関Educational Testing Service（ETS）が開発するTOEFLアセスメントファミリーテストの一つである。世界基準のテストとして信頼性が高く、世界65か国以上で利用されている。数あるレベルの中でTOEFL Juniorは特に中高生向け（CEFR A2～B2レベル）に特化して設計されている。

同校では、本テストを中学3年生～高校2年生の全学年で実施している。もともとは他のテストを利用していたが、やや信頼性が低かったことと、TOEFLが国際基準のテストとして信頼性が高いこと、ハイレベルのTOEFL iBTまでを見通せること、ビジネス、アカデミックいずれの場面でも強いことなどを理由にTOEFL Juniorに変更したという。

授業としては、中学3年生で週1回のTOEFL Juniorコースが用意されている。国際レベルのテストを受験するには、それに対応した質の高い訓練が必要であると考えているからである。またTOEFL Juniorにとどまらず、海外留学を視野に入れたその上のTOEFL iBTコースも課程外で設置されている。このコースは今年で5年目になるが、現在将来の留学に備え約70名が登録しているという。

生徒が納得

では、数ある民間英語検定試験の中からなぜTOEFL Juniorを選び、どういった成果があったのだろうか。先生方は生徒の様子をこう語る。

「リスニングでは、（問題文が）1回しか流れないという点で本物の英語を感じさせることができています。実際に相手は2回も3回も話してくれませんから。また、将来海外での学習を志す際にiBTなどを受けるわけですから、その素地をつくるものとして必ず役に立つと感じているようです」（米田先生）

「純粋に英語の運用能力だけが問われるので、帰国子女の生徒等は能力を存分に発揮できると喜んでいます」（田中先生）

これまで海外で生活した経験があったり、将来的に海外に出ることを強く意識している生徒たちにとって、自分たちが受験して納得できる、ということだろう。日本で開発されたテストは、どうしても日本人向けの英語になりがちだ。しかしTOEFL Juniorは国際スタンダードとして評価の高いTOEFLが元になっているもので、レベルの差こそあれ「本物」のテストということなのだ。

仏教教育を柱とし伝統文化を重んじる一方で、国際的なグローバルスタンダードを意識した教育を行うことは、まさにこれからの国際社会で求められる人材を育てることに他ならない。真の国際人育成に向けた同校の今後が楽しみだ。

（取材・文／編集部）